

四段対下二段の対応関係について

青 木 博 史

1. 自他対応形式の成立

四段活用と二段活用は、川端(1997)で「共存の形式」と述べられるように、ある種の対応関係にあると考えてよいだろう。これは、「四段・下二段両様の活用をもっている動詞は、全下二段動詞の三分の一弱に及ぶという事実」もそのことを示しているし、そして何より、次に掲げるように、四段・下二段の対応が自動詞・他動詞の対応を表していることは、上に述べたことを最も顕著に示しているといえるだろう。

- 1) a. 高き嶺に雲の付くのす我さへに君につきなな [伎美尔都吉奈那] 高嶺と思ひて
(萬葉集・十四3514)
- b. うつせみの常なき見れば世の中に心付けずて [情都氣受互] 思ふ日ぞ多き
(同・十九4162)
- 2) a. 臣の子の八重の紐解く一重だにいまだ解かねば [伊麻挖藤柯泥波] 皇子の紐解く
(日本書紀・天智天皇)
- b. 万代に心は解けて [許己呂波刀氣氏] 我がせこがつみし手見つつ忍びかねつも
(萬葉集・十七3940)

1) は四段活用が自動詞で下二段活用が他動詞である場合、2) はその逆で、四段が他動詞・下二段が自動詞となる場合である。

このような、自他の対応に関する場合については、これまでもかなりの研究の蓄積がある。ルヤスといった語尾の違いによる対応のタイプ(「残る-残す」「散る-散らす」「休む-休まる」)とともに、この活用の違いによる対応のタイプも、確固たるものとして重要な一角を占めているというのは衆目の一致するところである。例えば釘貫(1996)では、動詞の自他の対応タイプが大きく3つに類型化され、その中で、今問題にしているタイプは「第I群形式」と位置づけられている。

- 3) 第I群形式(活用の種類の違いによる自他対応)

しる(知)四自-しる下二他/うく(浮)四自-うく下二他

きる（切）下二自－きる四他／やく（焼）下二自－やく四他

第Ⅱ群形式（語尾の違いによる自他対応）

なる（成）自－なす他／よる（寄）自－よす他

うつる（移）自－うつす他／かくる（隠）自－かくす他

第Ⅲ群形式（語幹増加と語尾付接による自他派生）

ある（荒）自－あらず他／かる（枯）自－からす他

まぐ（曲）他－まがる自／わく（別）他－わかる自

上の 3) は古代語についてまとめられたものであるが、この枠組みそのものは現代語においても大凡あてはまる。ここでは、奥津(1967)の分類を掲げておこう。

4) I 「他動化」(Transitivization) …自動詞から他動詞への転化

乾ク→乾カス／落ちル→落トス

II 「自動化」(Intransitivization) …他動詞から自動詞への転化

マゲル→マガル／ハサム→ハサマル

III 「両極化」(Porarization) …或る共通要素から自動詞および他動詞への転化

帰ル－帰ス／アク－アケル／取レル－取ル

4) では、「転化」という要素が注目されるため、四段対下二段（現代語では五段対下一段）の対応形式は、ル・スによる対応形式の一部と同じグループに属することとなるが、この形式が確固たる位置を占めていることだけは確認することができよう。

さて、ここであらためて注目されるのは、四段と下二段の「関係」である。確かに自他の対応を表す両者の関係は、まさに「対応」であり、「共存」している。そのこと自体は疑いのない事実であるが、「乾く－乾かす」「挟む－挟まる」のような場合、一方から一方が「派生」したという関係が認められている（「乾く→乾かす」「挟む→挟まる」）のに対し、四段と下二段の関係については、このような形での記述がなされていない。釘貫では、第Ⅲ群は「派生」であるのに対し、第Ⅰ群は「対応」であるとして区別され、奥津でも「他動化」「自動化」に対して「両極化」であるとして、一線が画されているのである。

しかし、実のところ、釘貫や奥津がこれらを「対応」あるいは「両極化」と記述したのには、積極的な根拠が存するわけではなさそうである。四段対下二段という形で自他の対応を表す場合、どちらが自動詞でどちらが他動詞であるかは、例 1) 2) でも見たように、定まってはいない。「ル：自動詞」「ス：他動詞」という明確な表示を行うタイプとは、この点で大きく異なる。そこで、「自動化・他動化どちらか一方のみをとるわけにはいかないから」といった消極的な理由により、「両極化」と記述せざるをえないというレベルにあるものと思われる。

このような見方に対し、古くから「四段→下二段」という派生の方向を想定することも行われている。例えば細江(1928)では、「太古に於ては恐らく四段言の一種であつたらうとは東西の学者の略一致する所で」、「四段言に次で発達したものは二段言で」あったと、活用体系全体へと通じる議論の中で述べられている。また、望月(1944)や山口(1985)西尾(1988)などでも、「四段→

下二段」という派生の方向が示されている。しかしながら、これらの論において、そのような想定を裏付ける十分な説明がなされていないという事実も、やはり認めなければならないように思う。

さらに、木下(1972)などに示される、自他の表示に直接与らない形で、四段と下二段で意味の異なりを表す一群の語彙の存在を考慮に入れるとき、四段対下二段の関係について、「めったに時代の推移に説明を委ねてしまうことはできない」ようにも思えてくる。これは例えば、

5) a. うちなびく春の柳と我がやどの梅の花とをいかにかわかむ [伊可尔可和可武]

(萬葉集・五826)

b. をみなへし秋萩しのぎさ雄鹿の露分け鳴かむ [都由和氣奈加牟] 高円の野ぞ

(同・二十4297)

のようなもので、「別く」が四段に活用するときは「区別する」「分別する」という精神的作用を表し、下二段に活用するときは「掻き別ける」「押し別ける」という動作を表していると言われている。このような例は、他にも「寄す」「放く」「隠る」「忘る」など数語が存するが、それぞれ語毎に異なる様相を呈しており、必ずしも一般化されるものではないことが述べられている⁽¹⁾。

しかしながら、このような語彙レベルの関係については後述するとして、自他対応に関するもののみを対象とするならば、やはりこれは、「四段→下二段」という派生の方向を認めるべきなのではないかと考えられる。まず、現代語についての記述ではあるが、影山(1996)では次のような「派生」関係として捉えられている。

6) a. 他動詞+-e- →自動詞<反使役化>

割る／割れる, 抜く／抜ける, 砕く／砕ける, 折る／折れる, ……

b. 自動詞+-e- →他動詞<使役化>

建つ／建てる, 進む／進める, 並ぶ／並べる, 整う／整える, ……

このように、「-e-」という派生接辞が認められており、それぞれ「自動詞化」「他動詞化」をつかさどるものとして記述されている。

6) は一見すると、現代語についてのみ適応可能な記述ともとれる。すなわち、現代語では、終止形の音節数が五段よりも下一段の方が多く、したがってその有標性を示していそうであるが、古代語ではそうではないことがその理由の一つである。また、現代語の活用の表記法として、「割る-割れる」を例にとると、五段は子音語幹であるとして「war-」、下一段は母音語幹であるとして「ware-」とするならば、やはり「e」の分だけ有標であるように見える。しかし、古代語における四段と下二段の原初的な対応のあり方は、川端(1997)にも述べられるように、連用形にあたる「i甲」と「e乙」の相関であったと考えられ、そのように見ることができれば、下二段活用における形態上の有標性は見出しがたいとも考えられるのである⁽²⁾。

しかしながら、影山の記述で重要なのは、単に形態を記述するのみではなく、それと意味の関係を考察している点である。例えば「建つ-建てる」の対応について、次のようなテストの結果が示されている。

7) *新しい家が難なく建った。／*新しい家よ，建て。

このように，自動詞「建つ」は，「難なく」や命令形と共起しないのであり，このことは「新しい家が建つ」という事態が自然に発現する出来事であることを示している。これに対し，「切る－切れる」の場合，次の例文のように，自動詞「切れる」は「難なく」と共起する。

8) ナイフでロープを切った。すると，ロープが難なく切れた。

これは，「切れる」という事態が，「切る」という他動詞の存在を前提としていることを示している。つまり，7) 8) のテストにより，「建つ－建てる」の対応では自動詞「建つ」が，「切る－切れる」の対応では他動詞「切る」が，それぞれ意味的に無標であることが証明されるのである⁽³⁾。

以上のように，「四(五)段自－下二(一)段他」の場合も「四(五)段他－下二(一)段自」の場合も，いずれも四(五)段の方が意味的に無標であると考えられる。したがって，仮に形態上の有標性を認めないという立場からしても，意味の関係から「四段→下二段」という派生の方向を認めることができるのではないかと考えられる。

影山の議論でさらに注目すべきは，「自動詞化」「他動詞化」を引き起こす接辞間の意味の相違にまで踏み込んでいる点である。例えば「自動詞化」に係る接辞としては「-e-」の他に「-ar-」という形態（「植える／植わる」「集める／集まる」等）が認められるが，両者ののはたらきは大幅に異なるという。すなわち，「-ar-」の場合，動作主の存在を前提とし，その動作主を隠すという「脱使役化」が起こるのに対し，「-e-」の場合は，変化対象と使役主を同定する「反使役化」が起こるとされる。詳しい議論は省略するが，次のような例は，両者の意味が異なるものであることを端的に示すものといえるだろう。

9) a. 取っ手が勝手に外れた。／ページが勝手にめくれた。

b. *勝手に箱に本が詰まった。／*ピカソの絵が勝手に壁に掛かった。

10) a. ロープよ，切れないでくれ！／しみよ，きれいに取れてくれ！

b. *木よ，植われ！／*本よ，箱にきちきちに詰まるな！

(例文は，いずれも影山1996より)

このことは，異なる自他対応形式間に，異なる意味が備わっていることを示している。つまり，動詞の表す意味によって，どの対応形式に属するかがおのずから定まっていることを示唆するのである。そしてこれは，動詞が自動詞であるか他動詞であるかということと，同じレベルにあるものと考えられる。ヤコブセン(1992)でも述べられるように，その動詞の表す意味が，実世界における原型的な状況としてどのように認識されているかによって，「自他」という属性はおのずから定まってくると考えられるからである。

以上のように見てくることによって，釘貫(1996)での自他対応形式に関する記述は，少しく訂正を要することとなろう。3) をもう一度，下に掲げておく。

3) 第I群形式（活用の種類の違いによる自他対応）

うく（浮）四自－うく下二他／きる（切）下二自－きる四他

第Ⅱ群形式（語尾の違いによる自他対応）

なる（成）自-なす他／うつる（移）自-うつす他

第Ⅲ群形式（語幹増加と語尾付接による自他派生）

かる（枯）自-からす他／まぐ（曲）他-まがる自

釘貫の第Ⅰ群形式が、「対応」ではなく「派生」とすべきであることはすでに見たとおりであるが、これらの3形式が「Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ」の順序で成立したと説かれる点も、別の見方を検討する必要がある。上に述べたように、動詞の意味によって、その属する形式が定まっているとするならば、「異なった通時的段階において成立した」という点からのみ、この3形式の共存の理由を説くのは、いささか不十分ではないかと考えられるからである。

ただしⅡ群とⅢ群の関係については、釘貫の想定するように、Ⅱ群を基にしてⅢ群の形式が発達したと考えてよいのではないかと思う。すなわち、「-ar/-or」「-as/-os/-us」といった接辞（以下、「-ar」「-as」で代表させる）として成立することによって、派生後の動詞の弁別性を保ち、なおかつあらゆる種類の語尾の動詞からの派生を可能にしたものと考えられる⁽⁴⁾。他動詞から自動詞を派生させる「自動詞化」、自動詞から他動詞を派生させる「他動詞化」のシステムは、これらの接辞の成立によって大きく整備されるに至ったといえよう。

2. 助動詞「る」「す」の成立

前節では、自他対応に関する場合の四段と下二段の対応については、下二段が意味的に有標であり派生形と考えられることを確認した。そうすると、「派生」という観点からみるなら、自他対応形式は、

11) a. 「四段活用の下二段化」による派生

b. 「r」「s」の付接による派生

の2通りの方法が認められることとなる。このように整理するとき、実は、次のような問題点が存する。それは、接辞「-ar」「-as」という形式にあっても、そこに活用の違いが存するということである。すなわち、「ル」「ス」という語尾で「自動詞化」「他動詞化」が行われる場合であっても、四段に活用するものと下二段に活用するものとが見られるのである。

そこで、まずは、釘貫(1996)で「上代語文献で仮名書で確認されるもの及びそれに準ずるもの」という基準に沿って挙げられた語を、以下のように、四段に活用するものと下二段に活用するものとで分類してみた⁽⁵⁾。

12) a. 四段に活用する「ス」

ほす(乾), なす(寝), あらす(荒), からす(枯), ならす(馴), ちらす(散), ふるす(古), ぬらす(沾), ぬらす(解), くらす(暮), てらす(照), あかす(明), わかす(沸), つくす(尽), すぐす(過), おこす(起), とばす(飛), つかす(漬), おほす(生), かはす(替), めぐらす(廻), うらかす(楽), くるほす(狂), とよもす

(響), なびかす(靡), なやます(悩), にほはす(染), ほろぼす(滅), まとはす(惑), ゆらかす(揺)

b. 下二段に活用する「ス」

あはす(逢)

13) a. 四段に活用する「ル」

よそる(寄), かかる(懸), さかる(放), まかる(任), かはる(替), あがる(上), まがる(曲), さはる(障), をはる(了), こもる(籠), とまる(止), やすまる(休), くくもる(褻), かがまる(勾), かさなる(重)

b. 下二段に活用する「ル」

わかる(別), うまる(生), むすぼる(結)

一見して分かるように、12) 13) とともに、四段活用の例の方が圧倒的に多い。このことから、接辞「ル」「ス」は四段活用であることが基本なのではないかと考えられる。もちろん、数の優劣で決定されるものではないであろうが、先に見た、自他対応形式の場合を考え合わせると、「r」あるいは「s」という共通の語幹を有しながら四段と下二段とで対応しているのであるから、四段活用に基に下二段活用が派生したのではないかと予想される。

上に述べたことが証明されるには、四段のものに対して下二段の方が、意味の上で「派生的」であることが説明されなければならない。この点については、接辞「ス」の場合について、柳田(1993)に詳しく述べられるので、この記述を基に見ていくこととする。まず、柳田では、四段の「ス」がどのような動詞につくかが精査され、「散る」「落つ」「尽く」などの「無意志動詞」に限られることが指摘される。そしてここから、この「ス」は「他者の意志に関わりなく、一方的にある行為動作をそれに及ぼす」という、青木侖子(1977)で定義されるころの「他動詞」にあたるということが述べられた。

一方、下二段の「ス」であるが、12b) に掲げた「逢はす」以外にも、次のような語が存する。「逢はす」の例も含め、例文を以下に掲げることとする。

14) をちこちに鳥踏み立て白塗の小鈴もゆらにあはせ遣り [安波勢也理]

(萬葉集・十九4154)

15) 二上の山に隠れるほととぎす今も鳴かぬか君に聞かせむ [伎美尔伎可勢牟]

(同・十八4067)

16) 常陸さし行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ [伊母尔志良世牟]

(同・二十4366)

17) 片思を馬にふつまに負せ持て [於保世母天] 越辺に遣らば人かたはむかも

(同・十八4081)

このように、「聞かす」「知らす」「負はす」などの語が見られる。ここで注目されるのが、下二段「ス」は「聞く」「知る」「負ふ」などの他動詞にも付接している点である。この時点で「他動詞化」を果たす四段の「ス」とは何らかの相違があることが確認されるが、柳田ではこの下二段

の「ス」は「使役」のはたらきを果たすものとして、区別されることが主張された。すなわち、「ある者が他者に対して、他者自らの意志・或いは主体性をもって、又は他者に備わる能力・本性にもとづいて動作を行うようしむける」（青木伶子1977）はたらきをしていると説かれた⁽⁶⁾。

柳田の観察で重要なのは、四段の「ス」は無意志動詞に、下二段の「ス」は意志動詞にのみ付接する、と指摘される点である。「他動」と「使役」の区別は難解な問題であるが、ここに、「意志性」あるいは「コントロール」といった概念を用いる説明が不可欠であることは、ほぼ間違いないように思う⁽⁷⁾。そういった意味で、下二段の「ス」が意志動詞にのみ付接するという点は注目され、使役文との近さを窺わせるものといえよう。

使役文との近さという点は、上の14)から17)の例が、いずれも「～を～に……ス」という構文であることから肯首される。これについては、夙に朝山(1942-1943)にもその旨の指摘があり、次に掲げる「見す」「着す」なども同様であるといえる。

18) 山峽に咲ける桜をただ一目君に見せてば [伎美尔弥西氏 婆] 何をか思はむ
(萬葉集・十七3967)

19) 別れにし妹が着せてし [伊毛我伎世弓思] なれ衣袖片しきてひとりかも寝む
(同・十五3625)

「桜を君に見せ」「衣を我に着せ」という構文として解釈される。このような構文は、次に掲げるように、使役の助動詞「シム」が用いられた文とほぼ等しい。

20) 布施置きて我は乞ひ祈むあざむかず直に率行きて天路知らしめ [阿麻治思良之米]
(萬葉集・五906)

21) 人よりは妹ぞも悪しき恋もなくあらましものを思はしめつつ [於毛波之米都追]
(同・十五3737)

以上のことから、下二段に活用する接辞「ス」は、四段活用の接辞「ス」に対し、異なる意味を表すものとして作られたものと考えられる。すなわち、「他動詞化」をつかさどる四段の「ス」に対し、意志動詞に付接して「使役」に近い意味を表現するために、それに相応しく下二段という形態が求められたものと考えられる。これは、ヴォイスに関する異なりを表すために、四段から下二段を派生させた自他対応形式の場合と、ある種並行的に捉えることができるであろう。

ただし、これらの「聞かす」「知らす」あるいは「見す」「着す」などは、あくまでも「他動詞」であったものと考えられる。このことは、これらの下二段動詞が、現代語でも1語の他動詞として認識されているという事実が証明しているように思う⁽⁸⁾。「使役」表現は、この後成立した助動詞「す」を用いることによっではじめて、表されるようになったと考えるべきであろう。

しかしこの時、助動詞「す」が下二段活用として成立したという事実は、極めて重要であると考えられる。「使役」という、「他動」に対して「派生的」な意味であることを示すものとして、下二段という形態が必然的に求められたのではないかと考えられるのである。釘貫(1996)では、「る」「す」の源泉を活用形式の如何にかかわらず、自他対応に関するル語尾、ス語尾に想定するとされ、活用のあり方には言及されていない。しかし、他動の「s」は接辞から助動詞へ

「発達」する際に、四段から下二段へと活用を変えたのであり、この点はやはり注目すべきであろうと思う⁽⁹⁾。

上に述べたような「s」に関する記述は、「r」に対してもほぼあてはまるであろう。すなわち、「自動詞化」をつかさどる四段活用の接辞「ル」が基本にあり、それと意味の異なりを示す下二段の接辞「ル」が、派生形として存在したのではないかと考えられる。それらの例を以下に掲げておく。

22) 我が中の生まれ出でたる [産礼出有] 白玉の我が子古日は (萬葉集・五904)

23) 一世には二度見えぬ父母を置きてや長く我が別れなむ [阿我和加礼南] (同・五891)

24) ねもころに思ひ結ほれ [於母比牟須保礼] 嘆きつつ我が待つ君が事終はり帰り罷りて (同・十八4116)

そして助動詞「す」同様、「-ar」という接辞による派生と、下二段化という活用の転換による派生を、いわば組み合わせるような形で助動詞「る」は成立したものと考えられる。

25) 勅旨戴き持ちて唐の遠き堺に遣はされ [都加播佐礼] (萬葉集・五894)

26) 汝が母にこられ吾は行く [己良例安波由久] あを雲の出で来我妹子あひ見て行かむ (同・十四3519)

ところで、助動詞「る」は「ゆ」、助動詞「す」は「しむ」という、ほぼ同じ用法を持つ助動詞の存在が、上代において認められる⁽¹⁰⁾。これとの関係については、従来、上代では「る」より「ゆ」の方が多く用いられるが、中古に入ると、「る」が「ゆ」を圧倒していく。一方、「す」の方は、上代では未だ成立を見ず、「しむ」が使役化する唯一の助動詞としてはたらいっていたが、中古に入ると「す」が「しむ」を駆逐していく。大凡このように説かれている。しかし、シンメトリカルな体系を作り上げたはずの「ル」「ス」が、助動詞化に際し、足並みが揃っていないかのような記述については、少し疑ってみる必要があるように思う。

この点については、上代文献のその主たるものは萬葉集などの和歌であるということ、中古の散文では初期のものから大量の「す」が採集でき、「しむ」は漢文訓読文にしか見られない、といったことを考え合わせる必要があるように思う。すなわち、口語の世界にあっては、上代において助動詞「す」は、すでに成立していたと考えた方がよいのではないだろうか。上代にはすでに「る」が成立していたという事実は、「す」の成立を中古以前、少なくとも上代までは遡らせる可能性があるのではないかと思う⁽¹¹⁾。

文献以前の段階で、それぞれの動詞が自動詞であるか他動詞であるか、そして「自動詞化」「他動詞化」は可能であるか(対応する自他動詞を持つことができるのか)、可能ならば活用の転換によるのか接辞によるのか、といったことは個々の動詞の意味に応じてすでに決まっていたものと考えられる。そして、接辞と活用の転換を組み合わせる形で、四段に活用する「r」「s」を下二段化することで意味の異なりを示す方法が生まれ、これがさらに助動詞として発達したのが「る」「す」であったと考えられる。「自動詞化」「他動詞化」を果たすものとして機能した「四段活用の下二段化」は、「る」「す」の「助動詞化」に際してもまた、重要な役割を果たした

ものと考えられよう。

3. 語彙的派生と文法的派生

さて、ここで、先に少しく触れた、四段対下二段で意味の異なりを示す語彙群について述べておきたい。まず、上代のものについては、木下(1972)や釘貫(1996)等の検証を経て、「もつ(持)」「わく(別)」「さく(放)」「よす(寄)」「ふる(触)」「かくる(隠)」「はなる(放)」「みだる(乱)」「わする(忘)」といった語の存在が認められている。これらが語毎に異なる様相を示している事は先にも述べた通りであり、例を挙げての詳しい検討は省略する。しかしながら、四段活用が基にあって、下二段活用が意味の異なりを示すために後から作られたと考えられる語も、やはりいくつかは存在するように思う。

ここでは、「持つ」「頼む」「吹く」の3語について見ておきたい。まずは、これらの対応例を下に掲げておく。

- 27) a. 八田の一本菅は子持たず [古母多受] 立ちか荒れなむ (古事記・仁徳天皇)
 b. 片思を馬にふつまに負せ持て [於保世母天] 越辺に遣らば人かたはむかも (前出)
- 28) a. 悪しけくも良けくも見むと大船の思ひ頼むに [於毛比多能無尔] (萬葉集・五904)
 b. 初めより長く言ひつつ頼めずは [不令恃者] かかる思ひにあはましものか
 (同・四620)
- 29) a. 海原に浮き寝せむ夜は沖つ風いたくな吹きそ [伊多久奈布吉曾] 妹もあらなくに
 (同・十五3592)
 b. 時に飄風忽ちに起りて御笠吹け落されぬ (日本書紀・仲哀天皇)

27) 28) の「持つ」「頼む」は、これまで説かれる通り、四段の場合が通常他動詞であるのに対し、下二段では使役的な意味が付加されているものと見られる。構文的にも、「～を～に」という二格補語が現れる点など、使役構文との近さも見てとれる。すなわち、これらの下二段の例は、前節の14) から19) で見た、接辞「ス」を下二段化した「知らせ」「見せ」などの例と、非常に良く似ているのである。下二段化することによって、四段に対して派生的な意味であることを示した「ス」と同様であると考えられるならば、この場合の「持つ」「頼む」も、「四段→下二段」という派生の方向が想定されることとなろう。

そしてこのような派生は、中古以降、散発的とはいえいくつか見られる。四段他動詞を下二段化することによって使役的な意味を付加させた例として、「聞く」という語の例を、かなり時代は下がるがいくつか掲げておく⁽¹²⁾。

- 30) 天子ニ物ヲ講シテキケマイラセラル、人ナレハ (四河入海・二二ノ三三ウ)
 31) 伯禽ヲ魯へ封スル時戒テ吐握ノ事ヲ語テキケラレタソ (古文真宝抄・十19オ)
 32) 是は思ひの外な事を仰出された、さあらでは申てきけませふ
 (虎明本狂言・さひの目)

この「聞く」の四段と下二段の意味の違いは、上と同様、構文の違いとして現れている。すなわち、「聞く」という動作を行うようしむけられる対象、すなわち、いわゆる使役対象が二格として現れているのである。

しかしながら、次に掲げる「怪しむ」「塞ぐ」の例は、これらと少し異なっている。

- 33) 当時御ちういんの最中にて候。折節出御あらんこと、人定めてあやしめ申すべし。いかゞあるべく候らむ (保元物語・上)
- 34) かゝる事候へども、真言はいかなるとがともあやしむ人候はず (日蓮聖人遺文・四條金吾殿御返事)
- 35) シヤント大きに怪しめて [ayaximete] イソポを召して、「汝はなぜに舌ばかりをば買うて来るぞ」と言はるれば (エソポのハブラス・416-2)
- 36) 伊豆国住人大見平次、返合テ佐ノ前ニフサゲタリ (延慶本平家物語・二末13)
- 37) イヤシイ貪タ者カ位ヲフサゲテイタソ (玉塵抄・八17オ)
- 38) Fusague,uru,eta. フサゲ, ゲル, ゲタ (塞げ, ぐる, げた) 場所を占拠する。 (邦訳日葡辞書・補遺編)

上の文には使役対象としての二格は現れておらず、通常他動詞構文である。したがって、これらの下二段動詞は、「使役性」とは異なる、何らかの表現性を付加するために派生したのではないかと考えられる。

まず「怪しむ」の下二段形であるが、四段の場合に比べて、対象へのはたらきかけが強いように感じられる。四段の「怪しむ」は、疑いの気持ちを抱くという感情を表現するのに対し、下二段の場合、35) の例で顕著なように、さらに問いつめるようなニュアンスが含まれている。そのために、さらに時代を下がると、実際に対象を「叱る」といった場面で用いられるようになったものと考えられる。

- 39) さまざま養生する程に、早敢どらずして我と心腹たててすこしの事に人をあやしめければ、下々おそれて (本朝二十不孝・五3)

「塞ぐ」もほぼ同様で、「動きを封じて通れないように」とか、「他の人がその位・場所に就けないように」とかいったニュアンスを、下二段化することで表しているのではないかと考えられる⁽¹³⁾。

「怪しむ」「塞ぐ」の例から見てとれるように、四段他動詞を下二段化することは、「使役化」することではないと考えられる。そうすると、使役構文をとる場合においても、助動詞「す」を用いた「使役」とは異なる意味を表すために、派生形としての下二段動詞が用いられているのではないかと考えられよう。注(7)にも示したように、助動詞「す」を用いた使役文においては、使役主体から使役対象へのはたらきかけと、使役対象の行為という二つの独立した行為が複合的に表される。しかし、これまで見てきた下二段他動詞が表すのは、あくまでも動作主の動作ではないかと考えられる。これは、使役主体は「動作主 (Agent)」の他に「原因 (Cause)」も取りうるのに対し、「持つ」にしても「頼む」にしても、これらの下二段動詞が用いられた文の主体は必ず動作主である、という事実が証明しているように思う⁽¹⁴⁾。

そうすると、以下に掲げるような四段自動詞を下二段化した例も、これまでは「使役」と解されることも多かったが、やはり動作主の動作を表したものと解すべきであろう。

40) マルイマリガ身ニツイテマトイツケタ如ニシテヲチヌソ (玉塵抄・十二34オ)

41) いやでもおふでもよひ所へありつけてやらふ程に (虎明本狂言・さるざとう)

42) 一へんおひまはり、一ノ松の本にておいつけ、女おとこをおいて入なり

(同・つりばり)

41) の例でいえば、「ありつく」ようにしむけられる使役対象は問題ではなく、そのようにしむけている動作主の動作が表されていると考えられる。「ありつかせ」ではなく「ありつけ」と表現することは、あくまでも「使役」とは異なる、「他動詞」としての動作を表すことになるのではないかと考えられよう。

さて一方、29) として掲げた「吹く」もやはり、四段活用を下二段化することで特殊な意味を付加しているものと見られる。これについては、此島(1973)などで指摘されてきたように、受身的な意味を表していると解釈してよさそうである。そうすると、次のような例もこれと同様の例とみなすことができよう。

43) 世の人聞きも、人わらへにならむこととおぼす (源氏物語・葵)

44) あはれ、世にもあひ、年などもわかくて、みめもよき人にこそあんめれ、式にうてけるにか、此鳥は式神にこそありけれ (宇治拾遺物語・二8)

45) 軍兵共五百餘人、一人モ不残壓ニウテ、死ニケリ (太平記・十三)

「笑ふ」「打つ」という四段動詞を下二段化することによって、やはり受身的な意味を表していると考えられる。

ここでひとつ問題となるのは、助動詞「る」との関係である。先の30) から42) の場合、下二段化された動詞は、「す」とは違う役割を果たしていたのではないかということ述べた。そうすると、43) から45) の場合にしても、「る」と何らかの相違があったのではないかということが期待される。しかしながら、「吹く」「笑ふ」「打つ」などの下二段動詞は「受身」と解釈する以外なさそうであり、ここに「る」との意味上の相違は見出しがたいように思う。

これは、助動詞「る」が多義性を有することと密接に結びついているのではないかと考えられる。「る」の本質をShibatani(1985)で説かれるような「agent defocusing」と捉えるにしろ、尾上(1998-1999)のように「出来文」と捉えるにしろ、自発・可能・受身などの用法が認められることは事実であり、これらの意味は互いに関係が深い。つまり、自動詞側へ何らかの派生的な意味を表す形式を作り出すということは、必然的に自発・可能・受身などの意味領域へ踏み込むことへ繋がるのではないかと考えられる⁽¹⁵⁾。

このような、自動詞側の意味を表す形式を作り出すものとしての四段動詞の下二段化は、室町期において、文法現象と呼べるほどの広がりを見せた。

46) 乃請日丞相御史言上ノ日字カヨメヌソ、由字テハシアル歟ソ、サナウテハチツトモヨメ

ヌソ

(史記抄・一五5オ)

47) 秘セラル、ホトニ何タルコトヲカケタトモ不知ソ

(同・八25ウ)

48) 叢林ニハワイトヨムルカ、コチニハクワイトヨムソ

(蒙求抄・一54オ)

49) 先達ノヨメタハカウソ、サレトモ注カナイ程ニ

(毛詩抄・一二28オ)

50) 後漢ノ事ナラハ光武ノイエタ事ソ

(玉塵抄・一7ウ)

51) 天隱和尚ノ亭ノ額ニ遊目ト自筆ニカケタソ

(詩学大成抄・七2ウ)

これらの新しく派生した下二段動詞は、可能・受身・尊敬といった意味を表している。この現象については青木(1995)で詳しく述べたが、意味における助動詞「る」との相違は、ほとんどないと言ってよいであろうと思う。ただし、このような多義性を有したままの言い方は、長くは用いられなかった。しかしながら、可能の言い方については、否定文の中でその役割を発揮し、後世可能動詞として成立したものと考えられる。

52) 漆一ヨメヌ字ソ、シツシヨヨリトハヨミニクイソ

(毛詩抄・一〇27ウ)

53) 高祖ニ酒ヲシイタニハサウハエノメヌト云タソ

(玉塵抄・二一71ウ)

54) 先よりおの／＼書てもらいけるハ一字もよめず

(一休はなし・巻二)

55) 此中の御仕方、惣じてよめぬ事のみ

(好色一代男・巻六)

56) 酒論さま／＼の肴つくして、これでも呑めぬといふ時

(男色大鏡・巻七)

下二段化した形態は、今度は意味においても可能のみを表すという特性を活かし、助動詞「る」の可能用法を浸食する形で伸長を遂げた。ここにおいて、四段活用に対する有標形式としての下二段活用は、新たな文法的派生現象として確立されたといえよう。

4. おわりに

以上、四段活用に対応する形で存在する下二段活用が、ヴォイスに関する意味の異なりを示すための派生形である、と考えられる事象について述べてきた。しかしこれは、あくまでも共通の語幹を有し、「i 甲」と「e 乙」で「対応」する場合に限られる記述であって、活用体系全体に亘る議論ではない。したがって、細江(1928)で「太古に於て四段の一種に止つた活用形式が分岐して二段言なるものを生ぜし」めた、と説かれるところの是非を問うものではない。

ただし、二段活用一般における意味の特殊性に鑑みると、細江のように、二段活用は四段から「分岐」してできたと考える蓋然性はやはり高いように思う。実際、これまでの研究においても、意味論ばかりでなく形態音韻論的観点からしても、そのような考え方が大半を占めていると思われる。そうした中で、ひとり木田(1988)では「二段古形説」が唱えられており、注目に値する。木田の論拠のうち、

57) a. 下二段は活用する行に制限がない(四段には制限がある)

b. 下二段には音節数の制限がない(四段には一音節語がない)

といった2点は紛れもない事実であり、「四段のような整然とした母音交替の活用方式が、二段

のような一部は母音交替をしつつ、一部で「る」「れ」を接尾させるという混合した活用方式に変化したとは考えにくいことである」と述べられる理屈も、あながち無視できない。

本来ならば、これらの考え方を考慮に入れ、活用の成立そのものを考えていく必要があるが、これについては今後の課題としたい。ただし、この問題を考える際には、これまで述べてきたような意味論的な見地から、動詞の原初的なあり方をまず想定することが必要ではないかと思う。「自他」という観点からであるが、次のような整理の方法があり得るように思う。

58)	《自動詞》		〈他動詞〉	
a.	○		×	走る, あり, 死ぬ, ……
b.	ル	-	ス	成る, 余る, 流る, ……
c.	四段	→	下二段	止む, 立つ, 並ぶ, ……
d.	○	→	ス	明く, 過ぐ, 悩む, ……
59)	〈自動詞〉		《他動詞》	
a.	×		○	思ふ, 打つ, 誉む, ……
b.	ル	-	ス	移す, 顕す, 寄す, ……
c.	下二段	←	四段	切る, 解く, 焼く, ……
d.	ル	←	○	替ふ, 生む, 休む, ……

58) は自動詞として認識される動詞, 59) は他動詞として認識される動詞である。そして, a) は対応する自他動詞を持たないもの, b) 以下は対応語形を持つもの, さらに b) c) d) は, それぞれ釘貫の第Ⅱ群, 第Ⅰ群, 第Ⅲ群に相当するものである。

c) d) のように, 派生関係が認められる場合, 後から派生した有標の形式は, 根源的な活用形式の成立を考えるにあたっては除外すべきであろうと思う。つまり, 「明く→明かす」の関係をもって, 「下二段→四段」と説かれるのは適当でないといえよう。動詞が自他のいずれに属するかというレベルにおいて, あるいはそれがカ行であるかガ行であるかラ行であるかといったレベルにおいて, どのような活用をするのか, そして異なる活用形式はどのような相違を表しているのか, といった問題は考える必要があるように思う。いずれにしても, 今後の課題としたい。

注

- (1) 釘貫(1996)の記述は, 恐らくこの辺りの事情も考慮に入れ, 「派生」という考え方に慎重を期したのであろう。ただし, 「大体の所, 四段が原形, 下二段が派生形である」という可能性については認められている。
- (2) もっとも, 「e乙」はある種の融合によって生じた新しい音であるとする考え方からすれば, 有標といえるのかもしれない。馬淵(1998)では, 「e乙」は「二次的」な音であり, 下二段活用は「四段活用の動詞に対して派生的な形態である」と明言されている。
- (3) 同趣のことは, 屋名池(2000)でも, 次のように述べられている。

ア [自動: 下二段 / 他動: 四段]

イ [自動：四段／他動：下二段]

の両パターンについてみると、アのパターンを取る動詞の組では、他動詞が《一体のものを損傷する》（「切る」「焼く」など）意味に偏っており、そもそもものというものは外力を受けない限り分割などの損傷を受けないものだとするなら、《損傷を受ける》ことをあらわす自動詞（「切れる」「焼ける」）は、外力の作用をあらわす他動詞の存在を前提としており、後者の方が意味的に無標だといわざるをえない。

一方、イの場合は自動詞は《自然力による変化》（「浮く」など）《二者の関係が秩序ある方向へむかう変化》（「並ぶ」など）などをあらわし、他動詞は《そうした変化を促す／放置する》意味をあらわすから、こちらは自動詞の方が意味的に無標であると考えらるべきであろう。

- (4) 「r」「s」の前の母音「-a/-o/-u」については、屋名池(2000)において、名詞の露出形・被覆形の対応と並行的に捉えられると説かれている（「i2」「e2」「o2」は、それぞれイ列・エ列・オ列の乙類を表す）。

イ) a.	a=	saka= 《酒》	aka=s 《明》	他	maga=r 《曲》	自
	b.	e2#	sake2#	ake2#	自	mage2# 他
ロ) a.	o2=	ko2= 《木》	oko2=s 《起》	他		
	b.	i2#	ki2#	oki2#	自	
ハ) a.	u=	tuku= 《月》	tuku=s 《尽》	他		
	b.	i2#	tuki2#	tuki2#	自	

被覆形にあたる「a」「o2」「u」が、動詞では派生形の方にあたるため、新古からすると全くパラレルの関係ではないが、この考え方に従うなら、自他対応形式の成立は、上代よりも相当古い時代に想定されることとなる。

- (5) 釘貫のⅡ群に属するものについても、次のような分類が可能である。

- イ) a. 四段「ス」……なす(成), なす(鳴), よす(寄), こす(越), あます(余), うつす(移), かくす(隠), かへす(反), くだす(下), ながす(流), のこす(残), わたす(渡), のほす(浜), わしす(走), ゆるす(緩), あらはす(顕), もとほす(廻)
 b. 下二段「ス」……しす(死)
- ロ) a. 四段「ル」……なる(成), なる(鳴), よる(寄), あまる(余), うつる(移), かくる(隠), かへる(反), くだる(下), のこる(残), わたる(渡), のぼる(浜), わしる(走), ひろる(広), もとほる(廻), あやまる(誤)
 b. 下二段「ル」……ながる(流), はなる(離)

ただし、「しす(死)」は、馬淵(1998)で「検討を要するもの」とされている。

- (6) 「青木伶子(1977)」は、『国語学大辞典』「使役表現」の項も適宜含めている。そこでの定義は次のようになる。

使役とは、ある者が他者に対して、他者自らの意志・或いは主体性をもって、又は他者に備わる能力・本性にもとづいて動作を行うようしむけることである。

そして、しむけられた他者は多くの場合、使役動作の客体ではありながら、動作としての主体性を保持する。

他動詞は、その影響が他に及ぶことを意味する点では使役に近いが、影響を受けるものの主体性を全く没却している点において異なる。

- (7) 青木伶子(1977)の定義で重要なのは、「意志性」という点であり(注(6)参照)、「使役」の意味を考えるには欠かせない視点であるといえる。早津(1998)でも、使役のプロトタイプ的な意味が示されるが、やはり「意志性」がひとつのキーワードであると思われる。

「使役主体」から「使役対象」への「使役」というのはたらきかけと、使役対象(=動作主体)の行為という二つの独立した事態が複合的に表現される。

使役主体も使役対象も意志的に行為を行い得る存在としての人であり、使役対象から使役対象へ

のはたらきかけは意図的になされる言語的・態度的なものである。

- (8) これは、意味の上から必然的にそうなのであって、詳しくは早津(1998)などに拠られたいが、例えば「聞かせる」が表す意味は、単に動作主が「話す」動作と等しい。
- (9) もっとも、朝山(1942-1943)のように、ここに必ずしもス語尾下二段動詞を想定する必要もないように思う。「聞かす」「見す」から「聞か・す」「見・す」のように「異分析が行はれた」と考える必要はなく、「-as」という接辞を基に成立したと見るべきであろう。
- (10) 「ゆ」と「る」の関係については、「ユ↔ル音転化説」や「ユ方言説」等が唱えられているが、朝山・柳田・釘貫らによって説かれるように、「ユ」語尾自動詞と「ル」語尾自動詞(すなわち、接辞「ユ」「ル」)を基に成り立ったものと考えればよいのではないかと思う。
- (11) 接辞化・助動詞化の段階を見る限り、「る」と「す」はシンメトリカルであると考えられるが、その元となるル語尾動詞・ス語尾動詞の段階では、必ずしもそうではない。すなわち、ス語尾動詞はほぼ全てが他動詞であるが、ル語尾動詞は自動詞だけでなく、他動詞も数多く存する。それどころか、上代語の他動詞のうち、最も多くを占めるのが、実はル語尾動詞なのである。
- このことから、フが「継続」、ユが「自発」などの標識であったのと同様、スに「他動」を認めることはできるが、ルに「自動」を認めるのは無理があると考えられる。自動詞も他動詞も、ル語尾が最も多いのであるから、結局、ルは単に「動詞」であることを示す、いわば無色の音形であったと考えられるかもしれない。そうすると、古代語の原初的な「ル自動詞」対「ス他動詞」の対応の在り方は、「自-他」という等価的なものでなく、「無標-有標(他動)」という関係を想定した方がよいのかもしれない。
- (12) 「聞く」の下二段はかなり遅くまで残ったらしい。湯沢(1936)にも挙げられているが、ここでは江戸期の『修紫田舎源氏』の例をいくつか掲げておく。
- ・さあらば是より館に帰り、譜代の郎当家的子に委細の事を言ひ聞けん(第六編)
 - ・其の先に只一言、いひ聞け置かん事ありて(第九編)
 - ・此の後きつと差出ぬ様に、申し聞けるでござりませう(第三十編)
- (13) 「怪しめ」は「とがめ(咎)」, 「塞げ」は「さまたげ(妨)」のような、マ行あるいはガ行下二段の良く似た意味を表す語への類推も、あるいは考えられるかもしれない。
- この他、柳田(1973)には、「はばむ(阻)」「こばむ(拒)」の下二段化の例が挙げられている。
- (14) このことを考えるとき、影山(1996)は示唆的である。そこでは、「-e」他動詞と「-as」他動詞では、前者が主語を動作主に特定するのに対し、後者では動作主だけでなく出来事でもよい、という相違があるとされている。
- ・子供が／突風が ブランコを揺らした。
 - ・父が／*地震の揺れが 壁に穴を空けた。
- (15) 自発・可能・受身の意味の相違は、結局のところ、他動と使役の意味の相違と同じレベルにあるものと考えられるのではないだろうか。もちろん、典型的には構文の違いとして現れるが、意味の上では極めて連続的である。他動側の場合は、ある程度意味の相違に形態の相違が反映するが、自動側の場合は、このような対応が見られない。両者の非対称性についてはこのように解したいが、注(11)でも触れたような、自他の根本に関わる問題であろう。詳しい考察は、後考にまきたい。

参考文献

- 青木博史(1995)「中世室町期における四段動詞の下二段派生」『語文研究』79
- 青木伶子(1977)「使役-自動詞・他動詞との関わりにおいて-」『成蹊国文』10
- 朝山信弥(1942-1943)「国語の受動文について」『国語国文』12-11, 12-12, 13-6
- 奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形」『国語学』70

- 尾上圭介(1998-1999)「文法を考える 出来文 (1)-(3)」『日本語学』17-7, 17-10, 18-1
影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
川端善明(1997)『活用の研究Ⅱ』清文堂
木田章義(1988)「活用形式の成立と上代特殊仮名遣」『国語国文』57-1
木下正俊(1972)『萬葉集語法の研究』塙書房
釘貫亨(1996)『古代日本語の形態変化』和泉書院
此島正年(1973)『国語助動詞の研究』桜楓社
西尾寅弥(1988)『現代語彙の研究』明治書院
早津恵美子(1998)「「知らせる」「聞かせる」の他動詞性・使役動詞性」『語学研究所論集(東京外国語大学語学研究所)』3
細江逸記(1928)「我が国語の動詞の相(Voice)を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』
馬淵和夫(1998)『古代日本語の姿』武蔵野書院
屋名池誠(2000)「書評 釘貫亨著『古代日本語の形態変化』」『日本語学』201
柳田征司(1973)「活用から見た抄物の語彙」『愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部人文・社会科学』5-1
———(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
山口佳紀(1985)『古代日本語文法の成立の研究』有精堂
湯沢幸吉郎(1936)『徳川時代の言語研究』刀江書院
ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版
Shibatani Masayoshi (1985) "Passives and Related Constructions : A Prototype Analysis" LANGUAGE, 61-4

付 記

本稿の一部は、第172回筑紫国語学談話会、および第28回中部日本・日本語学研究会にて口頭発表を行った。貴重なご意見を賜った両研究会の方々に、心より感謝申し上げます。

なお、本稿は、平成13年度科学研究費補助金(奨励研究A)による研究成果の一部である。

(2001年9月6日受理)
(あおき ひろふみ 文学部講師)